

幕末明治の写真師列伝 第一回 田本研造

あの有名な函館の「碧血碑」の写真を撮影した写真師に田本研造がいる。田本は元は三重県の農家に生まれ、幕末に長崎に留学し、長崎の通辞・松木善四郎と共に函館に来たのは、安政6年の28歳のときであった。函館に来た田本はその後、悪性の壊疽のためロシア領事館の医師ゼレンスキーの手術を受けて、右足を切断することとなる。このゼレンスキーと会ったことが、その後の田本の運命を変えた。田本はゼレンスキーの写真撮影を手伝ううちに、写真に興味を持ち、横山松三郎、木津幸吉とも出会い、慶応年間には人物写真や風景写真も撮るようになったのである。あの函館戦争の最中でも田本は函館に残り、土方歳三などの旧幕府幹部たちを次々に撮影したといわれている。このことは函館戦争を題材にした久保栄の戯曲「五稜郭血書」にも書かれた。さて、田本が写真館を開業した場所はといえば、明治元年に叶同館(現函館市元町東本願寺)付近で露天写場を開業し、明治2年に会所町へ移転。これが北海道で初めての営業写真館である。

田本の写真館はその後の函館の大火で何度も焼けてしまい、その都度、同じ会所町で再建はされたのだが、残念ながら今は残っていない。田本には実子がいなかったため、親族より養子・繁(大谷筆之助)を迎え、明治10年江差に写真館を開業した。この江差の写真館は3年ほどで閉めてしまい、明治16年に繁は函館に戻ると田本写真館



立待岬にほど近い住吉墓地にある田本研三造の墓



会所町十五番地にあった田本写真館跡(函館市末広町)

を任されることになる。田本研造は、当初はこの会所町の田本写真館を繁に継がせるつもりであったのだが、先妻が亡くなって再婚した後妻に実子が生まれたため、気が変わってしまった。このため繁は独立して別に田本写真館を興すこととなる。こうして函館の町には二軒の田本写真館が長く経営されていた。

その後、繁の田本写真館の方は、繁の子息である田本胤二が継いだ。田本胤二は親族の大塚肇(胤二の姪が妻)に写真館の経営を委ねて、太平洋戦争の最中、七飯町に移り住んでしまった。そして田本胤二は七飯町で大果樹園主となっている。この田本胤二のご子孫が横浜の田本實氏というが、筆者もまだ確認できていない。

一方、会所町の田本写真館の方はといえば、田本研造の没後(大正元年10月22日、享年81歳)、弟子の木村研が継ぎ、その後も郷里の縁者である池田種之助が譲られて引き継いでいたのだが、うまくいかず廃業してしまった。結局は田本研造の実子は写真業を継がず、長男・胤雄は七飯高校の教師となっている。この胤雄、子息の敏のご子孫が、現在も函館に居られる田本英司氏になる。

長女・みつは井上某と結婚し、その長男が札幌在住の井上静雄氏。次男・康二は明治19年2月に死去。その他に田本研造の弟・喜代治、瑞穂のご子孫に名古屋在住の田本種穂氏がいる。

また余談だが、田本写真館で写真を学んだ人物に、戦前函館随一の写真記者と謳われ、「写真の永井荷風」とも評されたライカの名手・間世潜がいる。(森重和雄)